金牛・牛拝・酔牛

富永一登

丑年に因み、『太平広記』（巻434牛部）を中心に、六朝・唐の牛に関する怪異譚について雑感を記してみたい。

『広記』を読んで、まず目に止るのが、金牛の話である。唐・賈耽の『十道記』から、次のような話を採録している。

増城県（広東省）の東北二十里に、底無しの深淵がある。北岸に石があり、周囲三丈ほどである。漁師は、水中から現れた金牛が、この石上に蹲るのを見たという。晋の義熙年間に、県人がこの石の辺りで金鎖を発見し、それを手繰りよせた。すると突然、牛が水中から鎖を引張ったので、彼は鎖を握っていることができず、刀で叩き切って、数個の鎖を得た。この県人は、金持ちになり、長寿も得た。その後、義興の周霊甫も同様にして金鎖を得、大金持ちになった。

この話は、南斉・竺法真の「登羅山疏」（『御覧』900引。『白孔六帖』96・『御覧811引は「羅浮山記」に作る。厳氏『全斉文』では「登羅浮山疏」に作るが、この話は未収）と略同文であり、『十道記』は、これを引き写したものと思われる。

金牛に繋がっている金鎖を得て金持ちになる、所謂致富型財宝譚と言えるものとしては、これが最初の話のようである。この種の話は、唐宋以後、現代に至るまで、各地に伝説として残っており、澤田瑞穂氏の『金牛の鎖―中国財宝譚』（平凡社選書）に紹介されている。そこで、今少し金牛金鎖の由来について考えてみよう。

〝致富〟の部分は無いが、金牛金鎖が出現した話は南斉以前にもある。『御覧』などから例を挙げてみる。

●東晋・袁喬「江賦注」（『御覧』899引。『六帖』96作江賦、厳氏『全晋文』作江賦序）〈呉時、牛渚、釣、金鎖、金牛〉

●東晋・劉道真『銭塘記』（『御覧』900・66引、『水経注』40漸江水）〈明聖湖、金牛〉

●東晋・劉欣期『交州記』（『御覧』900引）〈交州居風山、鼻鎖、金牛〉

●宋・史苓（荃）『武昌（郡）記』（『御覧900・53、『類聚』6引）〈武昌牛崗、金牛〉

●宋・鄧徳明『南康記』（『御覧』66引）〈江西南康県、釣、金鎖、水牛〉

●宋・劉義慶『幽明録』(1)（『御覧』900、

『類聚』83、『事類賦注』9引）〈江西巴丘県、百金岡、水中、金鎖、金牛〉

●(2)（『御覧』71・811、『類聚』83引）〈牛渚津、金鎖、金牛〉

●宋・劉敬叔『異苑』巻7（『御覧』811・900）〈山東省即墨、古塚、金牛〉

●梁・顧野王『輿地志』（『御覧』46引）〈牛渚山、金牛〉

大半は、水辺や山の名称の謂れを記したものである。水と牛の関係について、石田英一郎氏は、農耕儀礼の中心であった牛と水神との結合を論じ、金牛は水怪を鎮めるものの一つとして、ベトナムから華南一帯に伝播したと考えておられる。また、金鎖については、禹の洪水伝説中に水獣を鎖で繋いだ物語があることを指摘されている。（石田英一郎全集巻五「新版河童駒引考」）確かに金鎖は、牛に限らず他の水獣も繋いでいたようで、唐の伝奇小説「柳毅伝」にも、水中の龍を金鎖で繋いでいたと記されている。これは、珠などの財宝を蔵するという水中別世界の説話と関連がありそうである。

ただ金牛の方は、水中からだけではなく、山にも出現している。これについては、吉田隆英氏の鉱山伝説ではないかという大変興味深い推論がある。（「金牛と洞穴—水中世界の禁忌と鉱山伝承—」集刊東洋学47所収）

ここで注目したいのは、金牛が文献に登場してくる時期の問題である。つまり、金虎・金馬と異なり、金牛が出現するのは東晋末から宋初にかけてであり、それ以前には見当らないということである。これに関して、二つの事が指摘できよう。一つは、この時期に多くの地方志が編纂され始め、その中に各地の伝説が採録されたということである。事実、『幽明録』『異苑』『搜神後記』など、この期の志怪小説には、地方志と同内容の怪異譚がかなり含まれている。

もう一つ興味をそそられる話が、『宋書』符瑞志の中にある。それは、宣帝（司馬懿）の時、張掖郡刪丹県金山から石図が出現し、司馬氏の王徳を称える瑞兆であると解読されたという記事である。『三国志』明帝紀裴注引『魏氏春秋』によると、図には、麒麟・鳳鳥・白虎・犠牛がそれぞれ東南西北に配置され、中央に馬が描かれていたという。また、石図には、「牛継馬後」の四字が記されていたので、宣帝は寵将の牛金を毒殺してしまった。（『晋書』元帝紀にも同様の記載がある）

これが、司馬氏の晋朝が衰退した東晋末期の金牛の出現に一役買っているのではないかと憶測する。

金そのものを王者の瑞兆と見做すことは、既に『史記』秦本紀・『漢書』武帝紀にも見られ、『宋書』符瑞志にも、金車・金鶏の出現を瑞兆として記してある。これに、「牛継馬後」という予言が絡み、東晋末に金牛が出現した話が伝わったのではなかろうか。その結果、『玄中記』に「金之精為牛」（『御覧』811引玄記紀。813引牛作車馬二字）というように、金の精そのものを牛と考え、梁の孫柔之の作といわれる『孫氏瑞応図』に、「金牛、瑞器也。王者土地開闢、則金牛至。」（『初学記』9・『六帖』96・『開元占経』117引）

とまとめられるようになったのではないかと思う。

『異苑』の例を見れば、金牛が華南一帯の水辺や山だけに出現したのではないことがわかるし、「不可移動、犯之、則大禍」という神聖な霊物として記されているのも瑞器の一つだと考えていたからだろう。

先の例の中で、唯一呉の時の話として記している袁喬は、晋朝簒奪を企らんだ桓温の寵将であった（『晋書』83）という事実も奇妙に「牛継馬後」と結びつく。

因みに、桓温は牛殺しを禁止したという。（『類聚』95・『広記』440・『御覧』885・911引『幽明録』）また、その子の桓玄には、老人の青牛を自分の馬と交換し、それに乗っていたところ、牛は水中に入ってしまい、程なく彼は戦いに敗れたという話（『広記』360・『御覧』900引『幽明録』）が残されている。

以上、今日致富型財宝譚として伝わる金牛も、その出現時には政争に巻込まれていたのではないかと邪推してみた。それにしても、『広記』に牛だけではなく、牛糞までも金や銀に変わる話（『湘中記』《王謨『漢唐地理書鈔』付陳運溶輯『麓山精舎輯本』所収『湘中記』にはこの話未収》と『酉陽雑俎』巻16から引く）があるのを見ると、当時の人々の発想の奇抜さに舌を巻かれる。

次に牛拝の怪について述べてみよう。『広記』は、唐・余知古の『渚宮故事』から、次のような話を採録している。

桓沖（温の弟）が江陵に陣をしいていた時のこと。夕食に牛を烹ようとしたところ、牛は都督をじっと見つめ涙を流した。都督が、「お前が私に跪くことができたら、生かしてやろう」と言うと、牛はすぐさま御辞儀をした。都督がまた、「お前がもし生かしてほしいのなら、ここにいる全ての人に御辞儀をせよ」と言うと、牛は雨のように涙を流しながら御辞儀をし続けた。都督は、桓沖が酔っていたので、その事を奏上できず、そのまま牛を殺してしまった。酔いから醒めた桓沖は、それを聞いて、都督に鞭罰を加えた。

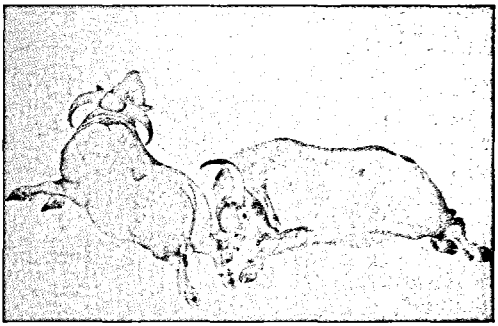
同じ話が『幽明録』（『御覧』900引）にあり、略同文であるので、『渚宮故事』は『幽明録』から引き写したと思われる。

人間の側から、犠牲となる牛の穀觫若とした様子に憐憫の情を催す話は、『孟子』梁恵王上篇に見えるが、この話は、牛自身が命請いを嘆願するという点で、如何にも志怪小説らしい。これに類する話として、「売られることを察知して、食事も取らず涙を流して痩せる牛の話」（『異苑』巻三）、「夢を通して苦役に耐えられぬことを訴える牛の話」（『御覧900引『幽明録』）などがある。

古来、祭儀の犠牲として殺され、或は苦役に酷使されてきた牛が、他の動物たちが人間と対等に活躍する六朝志怪の中で、始めて自ら語る機会を得たようである。

語るとは言っても、狐狸などのように変身の術を持たない牛は、六朝志怪中にあっては、御辞儀をし涙を流すか、夢に現れるかの程度であった。ところが、破

れ鍋や水桶さえ人間に化かしてしまう（『広記』369引『玄怪録』にある「元無有」の話）唐代小説においては、牛も完全に人間に化けて登場してくる。「東陽夜怪録」（『広記』490）では、橐駝や驢馬とともに人に化し、人間と対等に詩を作りあっているし、裴鉶の『伝奇』にある話では、同じく人に化けた虎と論争している。特に、『広記』牛部に「甯茵」と題して採録されている後者の話では、牛は大変饒舌である。



●〔唐〕戴嶧「逸牛図」

大中年間、甯茵は南山の麓の荒ら屋に仮住いしていた。ある月夜、庭で詩を吟じていると、突然〝桃林の班特〟と名のる処士が門を敲き、「某は力耕の徒ではあるが、今夜君の吟詠を聞き訪ねて来ました」と言う。招き入れて話を聞けば、『春秋』『史記』などの牛に関する故事を踏まえて、自己の来歴を述べる。また突然、〝南山の班寅〟将軍と名のる人が訪ねて来る。特と寅の二人は、互いに班氏の由来を故事をもとに語りあい、将棋を指し、茵と三人で杯を傾ける。酒が進むうちに、二人は牛と虎の故事を応酬して言い争うが、茵の執り成しで仲直りし、三人それぞれ詩を披露する。茵が特の詩を奇才だと賞めたので、寅は怒って、「班馬の才というのはあるが、班牛の才などというものはない」と言って立ち去る。特も怒って、「古人の重んずるのは白眉であって、白額ではない」と言って辞去する。明け方、甯茵が門の外を見ると、虎と牛の足跡が残っていた。足跡を辿り数百歩ばかり行くと、人家の廃屋があり、中に酒気を帯びた一頭の老牛が臥せており、虎の跡は山に入っていた。

以上がその話のあらましである。牛と虎に関する典故を羅列し、作者の博学と詩才を誇示せんとする衒学的側面はあるが、牛と虎を巧みに戯画化しており、周楞伽氏（『裴鉶伝奇』輯注、上海古籍出版社）が指摘されるように、一種の童話物語と言えるかもしれない。

ともあれ、最後の虎と論争した牛が酒気を帯びて臥している姿は、何ともユーモラスで、金牛として政争に巻き込まれ、犠牛としての苦に涙する牛の姿を見てきた筆者には、何かしら安堵させられるものがある。こう思うのは、丑年生まれのためであろうか。

（大阪教育大学）